

南フランスの遙かなる先史時代

阿子島 香

[東北歴史博物館館長講座概要：歴史博物館グローバル紀行⑥]

2024 年 9 月 28 日

講座要旨

今年度の館長講座も 6 回目となりました。ご来場いただき、有難うございます。「歴史博物館グローバル紀行」と題し、世界各地の博物館を、皆さんとご一緒に巡っています。考古学と歴史を中心にして、海外のミュージアムを訪ね、各地の展示と郷土史を、世界史の視点から考えていきます。全 8 回の連続講座は、各回それぞれ独立した内容ですので、お楽しみください。今後の内容は、次のように予定しております。⑦ネイティブ・アメリカンの世界 1、⑧ネイティブ・アメリカンの世界 2。「博物館学」という研究分野があり、「学芸員資格」を取得する要件として多くの関連科目の履修があります。今年の館長講座は、いわば「博物館展示論」と、「世界史の散策」とのクロスオーバーと考えていただければ幸いです。お話の内容では、時々、旧シリーズすなわち「東北グローバル考古学」の全 24 回の内容と関連させつつ、参照しています。旧シリーズは、引き続き東北歴史博物館の HP にて、講座概要を公開しております（多くは「読む館長講座」として、改めてエッセイとして再構成したものになっています）。あわせてご参照いただければうれしく存じます。

考古学とは、人類のあらゆる過去の世界を、残された物質的資料（遺跡・遺構・遺物）から復元し、歴史を考えていく研究分野です。その最古の時代区分は「旧石器時代」です。縄文時代以降の時代区分には、日本列島独自という性格が強いですが、旧石器時代は世界共通です。研究対象に国家の枠組みはありません。考古学は各国で、近代「国民国家」の中で確立・発展した学問ですが、旧石器時代の博物館展示には、それぞれの「お国柄」が出てきます。今回はフランスでの旧石器時代観にも触れてみます。

フランス南西部地方は、世界的に見ても旧石器時代研究の先進地でした。19 世紀の後半に本格的な発掘調査が行われて、氷河時代の気候変動の中で、人類が残した石器や骨角器の文化、獲物となった動物が、次第に解明されてきました。旧人（ネアンデルタール人）と新人（クロマニオン人）の存在も明らかになりました。レゼジー Les Eyzies は、南西フランスの中心都市ボルドーから内陸へ、大河ドルドーニュを遡り、その支流であるヴェゼール川の河畔にある小さな村です。ヴェゼール溪谷の両岸には、切り立った石灰岩地質の崖地が伸びて、下部に岩陰地形 Rockshelter や洞窟が多く存在し、そのような場所に旧石器人たちは居住を繰り返しました。

レゼジーには、国立先史博物館があります。小さな村に大規模な国立施設が存在すること

が、この地域の特質を示しています。巨大な岩陰立地に中世からの建築があり、中腹に「原始人」の彫刻像と博物館があつて村のシンボリック存在でした。博物館の収蔵資料は長い研究史を反映しています。21 世紀になってから、大規模な新博物館が建設されました。講座でご紹介します。人類の起源に始まり、石器の製作法の進化、旧石器時代の遺跡の内容、人類と環境など、展示は多岐にわたりますが、中心になっているのがレゼジー周辺の重要な遺跡からの出土品の展示です。大量の石器展示は、一見、同じようなモノの繰り返しに見えるかもしれませんが、旧石器時代の研究者、関心の深い市民にとっては、ひとつひとつのブースが、研究の歴史を知る「あの遺跡、この層序」といった意味を深く有しています。レゼジー周辺の遺跡の例をあげますと、「クロマニヨン岩陰」（1868 年に初めてクロマニヨン人の化石が発掘）、「ムスチエ遺跡」（複数の岩陰があり、中期旧石器時代ネアンデルタール人の石器文化の名称）、「マドレーヌ岩陰」（後期旧石器時代後半の世界的な名称、マドレーヌ文化の標識）、「ロージェリー・バス岩陰」「ロージェリー・オート岩陰」（後期旧石器時代の石器文化編年の標識遺物を出土した、重層した文化層の存在）などがあります。博物館には、ドゥニ・ペイロニーやフランソワ・ボルドほか、研究史の画期を作った研究者たちの調査資料（コンブ・グルナル洞窟など）が多数、展示されています。

アブリ・パトー（パトー岩陰遺跡）は、村の中にあり、後期旧石器時代の堆積層をそのまま展示する遺跡博物館（覆い屋根）です。約 35000 年前のオーリニャック文化期から、約 22000 年前のグラヴェット文化末からソリュートレ文化期までの文化層が重層している大きな岩陰遺跡で、発掘区の下面と壁面を出して公開に供しています。遺跡内に出土品展示室もあります。現在も発掘調査は継続しています。岩陰には、パリ都心東部にある国立自然史博物館の分館的な研究室があります。アブリ・パトーは、1958～1973 年にハーバード大学の H. モヴィウス博士が発掘調査して、後期旧石器時代の文化変化を追究した遺跡です。氏は、前期旧石器時代のハンドアックス文化圏とチョパー・チョピングトゥール文化圏を画する「モヴィウス・ライン」の提唱でも知られています。

フォン・ド・ゴーム洞窟には、クロマニヨン人が残した壁画美術が良好な状態で保存されていて、現在も一般公開されています。人数限定ですが、専門の案内者に従って、山中にある奥深い洞窟の先史美術を見学できるのは、幸運です。ライトに照らされて、野牛やウマの彩色壁画が浮かび上がります。ヴェゼール溪谷の洞窟遺跡群は、1979 年にユネスコ世界文化遺産に登録されました。ラスコー洞窟は、レゼジーから約 35 キロの距離になります。

講座では、館長撮影の多くのスライドで、博物館の展示が実際にどのようなになっているか、どのような点に重点を置いているか、遺跡の現場を公開している野外博物館はどのような場所か、先史時代を対象とする視点はどのようなものであるか、などを考えてみます。

今回講座の対象とする南西フランスの旧石器時代は、館長が 1982 年以来、断続的ながら 40 年以上にわたり研究してきた地域と時代です。その中から、近年日本でも重視されるようになり、博物館法改正の背景にもなっている「文化観光」の参考になるような遺跡群をご紹介したいと考えました。美食でも定評あるペリゴール地方、遥かなる土地と太古へのロマ

ンをもお楽しみください。

トピックス

以上は、全体の要旨です。以下に、スライドで解説した内容から一部を選んで、项目的に紹介します。

- ・今回の副題は、(レゼジー村と、その周辺)とした。パリからボルドーまで、特急で約 4 時間かかったが、近年 TGV 路線となって、約 2 時間で到着するようになった。ボルドーは特にワインの名産地として有名だが、歴史地区である旧市街は世界遺産「月の港」に登録されている。レゼジーへはローカル線に乗り換え、ドルドーニュ県都のペリグー経由などがある。レゼジーの SNCF (フランス国鉄) 駅は、1868 年にクロマニョン人の化石を出土したクロマニョン岩陰遺跡の近くにある。ドルドーニュ川の支流ヴェゼール溪谷の橋から、両岸に岩陰地形のようすが見える。レゼジーは、旧石器時代研究の中心的な場所として、歴史・考古学愛好家、研究者たちに著名な、いわば「聖地」のような場所である。「聖地巡礼」の如く、世界中から考古学者たちが訪れる、一度は訪ねたい土地である。

- ・村の観光案内所には、考古学の研究史を示す銘板がある (スライド)。ラルテとクリスティは 1863 年に、ここで発掘調査を始めた、とある。ヨーロッパでは、このようにゆかりの偉人を、かつて住んでいた場所に銘板で示すことは標準的な顕彰法である。1875 年刊行の研究書「アクイタニアの遺物」(アキテーヌ地方の古名) は、画期的な旧石器時代研究書で、リトグラフの石器実測図も精細。しかし、まだ洞窟壁画美術は発見されていなかった。東北大学附属図書館の梅原文庫 (京都大学教授だった梅原末治の旧蔵書) にある。

- ・レゼジーは、夏になると「バカンス」のシーズンで、多くの旅行者、滞在者で賑わう。一方、冬季は閑散とした場所になって、好対照である。ヴェゼール川の両岸に、切り立った崖が伸びて、その下部には川によって深く浸食され形成された岩陰地形がある。旧石器時代の遺跡は、岩陰や洞窟に、累々と重層した文化層となって残されている。地質は石灰岩地帯なので、アルカリ性の堆積物であり、人類の化石、食料資源だった動物の骨、骨角器なども、大量の石器と同じ層に含まれて残っている。日本列島ではほとんど溶けてなくなるような、有機質遺物の保存状態が非常に良いのである。

- ・岩陰遺跡の堆積層は、旧石器時代の石器文化の編年に、貴重な資料を提供した。19 世紀の後半から、すでに層位学的な編年研究が進められてきた。日本考古学の場合は、縄文土器の層位的編年のように、順序として型式学的研究のあとに層位学的研究が進められた研究史があるが、フランス南部では逆で、まず眼前に存在する累々とした文化層の連続堆積という遺跡の条件によって、研究の最初から層位学的編年が進められたのであった。フィールドの条件が幸いしたのである。

- ・層位学的な石器文化の編年は、レゼジーではロージェリー・バス岩陰、ロージェリー・オート岩陰などで進められた。先史考古学と第四紀地質学が密接に連携して研究が行なわれるのも、フランス考古学の特長といえる。学際的な研究は 19 世紀後半から緊密で、氷河時

代の地質学的な編年（ウルム氷期の中の亜氷期、亜間氷期＝休氷期の設定と年代的位置づけなど）と、石器文化の型式学的な分析（オーリニャック文化、ソリュートレ文化、マドレーヌ文化の特徴的な石器群と、それらの型式組成＝組み合わせと相互の割合）、とが関係づけられた。石器文化の編年の基礎を確立したのがドゥニ・ペイロニー Denis Peyrony で、20世紀前半のことだった。レゼジーの国立先史博物館には、ペイロニーの調査資料の実物が豊富に展示されている。ドルドーニュ県はペリゴール地方とも呼ばれ、遺跡の宝庫といってもよい土地である。同県はまた美食の地としても名声が高い。フォアグラは有名。ドルドーニュ川流域は、古来の要衝の地であり、数多くの古城（シャトー）があり、歴史的な史跡も多い。レゼジーの近くにサーラという町があるが、中世都市の雰囲気を良く残していて、演劇祭などもある。温暖な気候であり、多くのバカンス客が訪れる土地、ペリゴール地方となっている。観光に歴史の学びなどを融合させる「文化観光」概念は、日本でも近年重視されて、近年の法令施行、また博物館法の改正にも関連がある。今回講座でレゼジーの周辺を紹介するのは、「文化観光」という面で、参考になると考えたこともある。

- ・スライドで、レゼジー周辺の代表的な遺跡の位置を説明。鉄道駅近辺のクロマニヨン岩陰は、クロマニヨン・ホテルとなっている。ホテルの裏手に遺跡がある。鉄道建設の関連工事で発見されて、太古の人類化石は、進化した人類を示すとされた一方、同じ頃に発見（1856）されたドイツのネアンデルタール人は、野蛮な劣った人類とされ、両者は比較された。ヨーロッパ各国の産業革命は、多くの土木工事、建設工事をもたらした結果的に多くの先史時代遺跡が発見されることになったという、意外な結びつきがある。

- ・レゼジーの村はずれには、フォン・ド・ゴーム洞窟があつて、一般公開されている（2011年8月現在）。早朝に並んで入洞できた。一帯は史跡公園のようになっていて、遊歩道から案内人に従って、洞窟に入る。壁面に触れるのは厳禁である。洞窟壁画は、一見して認識できるような明確なものではなく、暗黒の中で長年の調査で存在が記録されてきた。非常に劣化した図像も少なくない。案内人は、図像の存在箇所、配置をよく理解していて、器用に照明をあてて、説明する。かつて壁画の研究模写は、重要な研究手段であり、フォン・ド・ゴームの模写例（スライド）は、ブルイユによるマンモスゾウとヤギウ（ビゾン）。ブルイユは、20世紀前半の旧石器時代研究をリードした学史的人物である。カトリックの神父（アベ）でもあった。日本語の各種文献では、ブルイユ、ブロイ、名はアンリ、またアベ・ブロイ、ブルイユ神父など、幾通りかに表現されているが、同一人物である。

- ・クロマニヨン人の洞窟壁画が最初に発見されたのは、1879年のスペイン、アルタミラ洞窟でのこと。パリ万博で旧石器時代研究に触発されたカンタブリア地方の下級貴族、ザウトゥオラが自分の所領でアルタミラ洞窟の入り口を調査していた。娘マリアが見えなくなり、洞窟から出てきて「お父さん、ウシがいるよ」と言っ、て、牡牛の天井画の発見になったという、有名なエピソードが知られている。学界で発表した、が、否定的な意見が強く、失意のうちに世を去った。その後1901年に、このフォン・ド・ゴーム洞窟において、クロマニヨン人の壁画は再発見され、彼は名誉回復された。その時の専門家がブルイユだったという学史

がある。ブルーユは、また 1940 年、少年たちによるラスコー洞窟発見の際にも、重要な役割を果たし、ナチスドイツ占領下においての壁画洞窟保存に貢献した歴史がある。

・ラスコー洞窟は、レゼジーから約 35 キロ北のモンティニャックにある。1982 年頃に壁画保護のため全面閉鎖となっており、現在は誰も見学できない。近傍に地下を掘削して人工の洞窟を作り、当時と同じ手法による精密な壁画複製を製作、ラスコー 2（第二ラスコー）として一般公開している。館長も見学したが、同じ石灰岩地質に掘られた洞窟で、一部だけの複製であっても相当な迫力の展示である（内部撮影禁止）。東北歴史博物館での 2017 年特別展「ラスコー」の展示物は、写真測量技術を応用して、より精密であり、世界を巡回してラスコー 3 と言われた。近年ラスコー洞窟の近くに新博物館が作られて「ラスコー 4」と称される。将来の見学を楽しみにしている。これらはフランスの誇りといえよう。

・アブリ・パトールは、土地所有者の名前をとってパトール岩陰と呼ばれた。発掘された遺跡を、そのまま野外で公開展示している事例である。覆い屋は恒久的で、空気の流通や天候（冬季は相当に寒い土地）も配慮され、隣接して洞窟の地質を活かした展示室を併設し、遺跡の意義を詳しく解説している（スライド多数で紹介）。石灰岩地質の岩陰地形と、堆積層は非常に硬く、特別な保存処置は必要とせず、発掘調査時の壁面セクションと、生活面とを、そのまま展示している。発掘された遺構や地層をそのまま公開し、隣に遺跡の意義を解説する博物館という概念は、身近なところでは、仙台市太白区長町の「富沢遺跡保存館」（地底の森ミュージアム）と共通するように思う。実地プラス解説で、相乗的に遺跡に学ぶ効果が増す。

・パトール岩陰の堆積層は、深さ 9m に及ぶ。巨大岩陰遺跡である。アメリカ、ハーバード大学ピーボディ博物館の人類学教授、モヴィウス博士 Prof. Hallam Movius, Jr. により継続的に発掘調査が進められて、世界的に著名な遺跡となった。発掘は、1958 年から 1973 年まで実施されて、後期旧石器文化の解明に大きな寄与をもたらした。私が最初にパトール岩陰を訪ねたのは 1982 年であったが、発掘が中断して 10 年も経過せず、発掘トレンチや断面が、草が生い茂るままに放置されていた状況だった。その後、遺跡の整備が進んで、公開史跡博物館になった。

・遺跡の断面には、どの年代の、どの石器文化に属する層序であるか、また当時の気候はどのようなであったか、などが説明されている。フランスの旧石器研究は、伝統的に第四紀地質学と緊密に連携してきたが、そのような研究方法は、気候変動の説明板などに、よく表現されている（スライド、寒冷で乾燥した時期の堆積層など）。出土品の説明は、隣接の展示室にあり、石器文化の特徴が詳しく解説されている。石器の型式名が詳細に解説され、フランス旧石器研究が、タイポロジー（型式学、Typology）を重視することがよくわかる。

・石器の型式学は重点的に説明されているが、人類生活の痕跡である炉の跡、石器の分布場所（平面分布図）、人類化石の出土など、岩陰内部を生活面として考える視点も重要とされている。パトール岩陰では、グラヴェット文化の終末頃（約 22000 年前）に、大規模な落盤が起きて、生活可能な空間が狭くなった。その後、クロマニヨン人の埋葬の場所として利

用された。6体の化石人骨が出土していて、頭骨は複製展示されている。

・国立先史博物館の展示内容を、多数のスライドで紹介。この博物館は旧館を引き継いだ形で、21世紀になってから大規模な新博物館として再開館した。旧博物館は岩陰の地形を利用して、出土品を中心に展示していた（館長は1980年代に見学）。岩陰の建物前には、クロマニオン人として知られる彫像があり有名だったが、姿形はネアンデルタール人を表現していた。作家は「原始人」と題していた。現在も彫刻作品はそのまま、新博物館の屋上から行ける。そこからは、レゼジー周辺の地形や景観がよく分かる。

・新博物館は、レゼジー周辺の遺跡に限らず、全世界的な旧石器時代についての展示を行っていて、ジオラマやパネル、また映像展示も充実している。人類進化の展示では、従来のように我々、ホモ・サピエンスに至る系統樹のような進化史ではなくて、ほとんどの化石人類種は、絶滅種であったのだ、と強調される展示になっていた。

・導入展示にあたる部分では、人類の祖先の画期的な遺跡と標本が解説されていた。タンザニア、ラエトリ遺跡でのアフール猿人が残した人類最古の足跡。二人？（2個体）が並んで歩いて、泥質の地表に足跡を残し、やがて火山灰に覆われた遺構の象徴的な展示がある。直立二足歩行（足跡は約375万年前と展示）は、石器の製作よりはるかに古く遡ることが実感される。最古の石器製作は、エチオピアのオモ川下流域（世界遺産）で発見された約250万年前の資料。また、原人への進化の道筋は、ケニア、ツルカナ湖畔で発見された最古（約180万年前と展示。160万年説もある）のヒト属、ホモ・エルガステル個体の骨格複製と姿の推定復元展示で示される。通称「ツルカナ・ボーイ」である（7～11歳とされる）。脳容量は1000ccに満たないが、全身の体つきは、原人的な姿で、直立して復元展示されている。

・19世紀から現在まで、世界の旧石器時代研究の重要なフィールドであったレゼジー周辺の洞窟・岩陰遺跡群である。石器の実物展示の各室は、圧巻といえる物量の出土資料展示ケースが並び、考古学研究者にとっては、いくら時間を費やしても見学が終わらないという感じである。著名な遺跡、発掘した研究者、出土品の数々、自然環境の復元など、この時代を研究する学徒であれば、一度は訪ねてみたい場所であろう。レゼジー駅と表示された、小さなフランス国鉄駅に降り立っての、ワクワク感は共通のものに違いない。やはり旧石器時代研究の「聖地」であり、繰り返しであるが「聖地巡礼」に詣でる研究者たちが絶えないのも、うなずけることを再確認した。

・バカンス先としても人気がある。村の通りには、レストラン、カフェや土産物店が多くあり、その一つは店名が「ホモ・サピエンス」で、石器製作の達人が家族経営とのこと。たくさんさんの「石器時代グッズ」に誘惑される。実験製作のフリント製石器も販売していた。前期旧石器時代のハンドアックス、後期旧石器時代の石刃、投槍器の複製などもあった。私が何を求めたかについては、ご想像にお任せしたい。

（本稿は、館長講座での配布資料に補足したものです。）